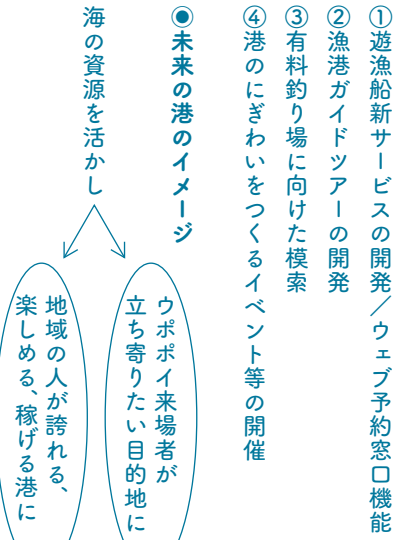


シン・白老港」決起集会開催報告！

9月24日、白老港魅力化プロジェクト「シン・白老港」の決起集会を開催しました。
SHIPSが目指す「シン・白老港」の取り組みについて説明したあと、(公財)はまなす財団からこの度SHIPSが採択された「地域づくり支援事業」について、そして帯広で畑ガイドの事業を展開する「いただきますカンパニー」代表の井田美美子さんからお話をお聞きました。

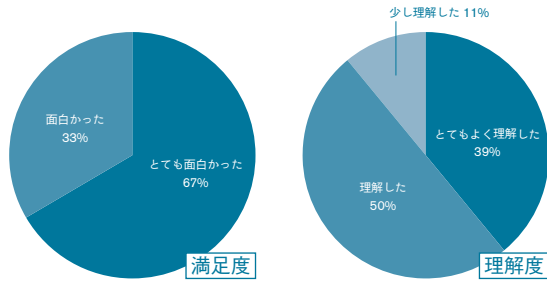


30名ほどの町内外の方々が参加！

町内はもちろん、町外では苫小牧、黒松内、札幌からのご参加と、さらに北海道胆振振興局、運輸局、北海道開発局、白老町役場、町議会議員、白老観光協会と町内外でさまざまな役割を担う皆さんにご参加いただきました。
終盤では、役職等を超えて意見交換が行われるなど、大変ワクワクする時間となりました。開催日程がチェブ祭と被っていたこと、さらに大変良いお天気であったことから、いぶり中央漁業協同組合や漁師さんの参加は叶いませんでしたが、また次の機会をつくっていきます。

「シン・白老港」決起集会 アンケート結果

本日の決起集会はどうでしたか？



「海の人、土の人、風の人」それぞれが活躍すること。井田さんからのエール



2012年に農業体験ツアーの会社を立ち上げ、地域の農家と連携しながら、消費者に農業への理解を深めてもらう「畑ガイドツアー」を提供している「いただきますカンパニー」。シン・白老港のプロジェクトの1つである漁港ガイドツアーの開発の先進事例として改めて学びたいと、今回お招きしました。井田さんからは、「畑ガイド」の取り組みから得たこととして、農家さんの思いを汲み取りWin-Winの関係を築くこと、また協力してくれる農家さんらと適度な距離感を保ちながら商品造成を心がけること、そして商品を改善し続けることの大切さについてお話いただきました。
また、業種の違いを乗り越えて連携する難しさに触れながら、最後には、海の人(漁師・港湾に関わる人)、土の人(行政・町民)、風の人(外から来たよそ者)が力を合わせ、こうした新しい取り組みを始める風の人を、土・海の人たちは叱咤激励し、試行錯誤しながら魅力的なプロジェクトにしてほしいとエールを頂きました。
井田さんには、漁港ガイドツアー開発のアドバイザーとして、引き続きお付き合いいただく予定です。

水産・港湾関係者、漁師さん、釣り好き、海好き、魚好き大歓迎「海と港となつこの部屋」開店します

白老港の魅力アッププロジェクト「シン・白老港」がスタートし、ゆっくりとプロジェクトを進めているところです。今回、ぜひ海や港についていろいろな方とお話したい！私の考えていること聞いてほしい、相談に乗ってほしいという目的のもと、「なつこの部屋」を開店する運びとなりました！！カラオケあり、ドリンク各種取り揃えております。ふらっとお立ち寄りいただけたら嬉しいです！
もし好評なら、他のエリアでも実施できたらと思っています。
(次回は、漁師さんたちの漁が落ち着く3月を予定しています)

開店日：2023年11月26日㊤、12月3日㊤、10日㊤、24日㊤
時間：15:00-20:00
場所：coffee&wiskyカイザー隣
料金：会費 大人 1,000円 (大学生以下無料)

海と港となつこの部屋

シン・白老港

「シン・白老港」次の展開

有料釣り場実現に向けて
苫小牧一本防波堤「苫小牧港海釣り施設」実現までの道のりを調査研究

元漁師さんの瀬谷さんの強力なバックアップのもと
漁港ガイドツアーのベース構築&実験

百モモフネ舟 vol.3

2023年11月

発行：一般社団法人SHIRAOI PROJECTS
(0154-940404)
白老町大町三丁目11-11
編集：山岸奈津子(代表) 山岸奈津子
デザイン：阿部裕美
印刷：印刷局 印刷
発行所：印刷局 印刷

MUSIC ARCHIVE

第48回 札幌学院大学学術講演会
講演と音楽の夕べ
人はなぜ音楽を奏でるのか

第1部 講演
音楽の起源を訪ねて
～音楽考古学への問い
橋谷 隆男

2023.11/18(土)
14:00-16:30(13:30 開場・受付開始)
会場：しろおい創造空間「蔵」多目的ホール
白老町本町1丁目7-5

参加無料 事前申込 先着80名

第2部 音楽ライブ
海洋ゴミ楽器集団ゴミンゾク
スペシャルライブ

この夕べは、「人はなぜ音楽を奏でるのか」をテーマに、「音楽考古学」という学問を切り口に音楽の起源を紐解く講演と、アフリカ・インド・モンゴルなどさまざまな民族楽器と民族音楽に精通しながら、世界的に問題となっている海洋ゴミを活用して楽器を製作するアーティスト「ゴミンゾク」によるスペシャルライブを開催し、音楽の起源を探るだけでなく、音楽の力で社会に貢献する姿を皆さんに紹介いたします。

札幌学院大学
SHIRAOI COLLEGE UNIVERSITY

11月イベント情報

●11月18日㊤ 札幌学院大学学術講演会「人はなぜ音楽を奏でるのか」

「人はなぜ音楽を奏でるのか」をテーマに、「音楽考古学」という学問を切り口に音楽の起源を紐解く講演と、アフリカ・インド・モンゴルなどさまざまな民族楽器と民族音楽に精通しながら、世界的に問題となっている海洋ゴミを活用して本格的な楽器を製作・演奏するアーティスト「ゴミンゾク」によるスペシャルライブを開催！

時間：14:00-16:30
場所：しろおい創造空間「蔵」
参加：無料(先着80名)／右のQRからお申込ください
主催：札幌学院大学
協力：一般社団法人SHIRAOI PROJECTS



●11月19日㊤ ゴミンゾクと行く！海洋ゴミ散策とミニ公演会

上記の講演会に連動して、白老の海岸を海洋ゴミを吟味する海岸散策と、トーク&ライブを開催！

時間：10:00-12:10
場所：白老海岸、しろおい創造空間「蔵」
参加：無料(先着20名を予定)／右のQRからお申込ください
主催：一般社団法人SHIRAOI PROJECTS



スケジュール

10:00 白老海岸散策／海洋ゴミ
(10:45 海岸から「蔵」に移動)
11:00 トーク：ゴミンゾクリーダー 大表さん
11:40 ミニ演奏会
12:10 終了／交流会



私の母校であり、大塚町長の母校でもある札幌学院大学が、地方で年に一度開催する学術講演会。今年は白老開催が決定し、その企画協力としてSHIPSが業務委託をいただいています。音楽考古学を専門とする椋谷隆男教授が登場されるとのことだったので、私が活動に注目していた海洋ゴミを使った楽器を制作するアーティスト集団「ゴミンゾク」の皆さんとコラボしたいと提案し、実現しました。
せっかく白老にお招きするので、翌日より深く彼らの活動を知る機会として、連動イベントを実施します。



応援・ご協力
お願いします！

- スタッフ募集(若干名)
こういった活動に興味がある、力を持って余している方、一緒に取り組みませんか？ぜひ相談させてください。
- 寄付・賛助会員募集／SHIPSの活動費になります
寄付 500円～
法人会員 年間30,000円(～2024年3月)
個人会員 年間10,000円(～2024年3月)



- SHIPS活動通信「百舟 モモフネ」設置店
- SHIPS活動通信「百舟 モモフネ」広告枠
1枠 30,000円～(要相談)

※詳細はホームページをご覧ください、山岸までご連絡ください。

広報PRのプロに聞く「おしえてなっちゃん！」

連載コーナー

*今回のお悩み

自分のお店にもっと人が来てくれるようにしたいが、今お店の価値を少し見失っている状態…。お店の価値を見つけ直し、お客さんにもっときてもらうためにはどうしたらよい？(飲食店経営 Sさん 41歳)

*回答

お悩みありがとうございます！自分のことって本当によく分らなくなりますよね。(こんな仕事していますが、私もそうです。)

お客様にとりあえず一度来店してもらうためには、広告を打つことや、何か派手なこと(例えば写真映えるメニューの開発や、はたまたま大安売りのようなこと)を実施することなどが考えられますが、それだけだとやっぱり長続きしないし、体力(財力)を消耗するばかり。さらに、なんか話題だから来てみたけど、思っていたのと違う、一度来たら十分…などリピートに繋がらず、またギリギリになるパターンも考えられます。広報PRというのは、**お客様と長く継続的に関係を作り続けるための考え方**と言えます。マーケティングとも絡み合い複雑に考えることもできますが、ここではまず3つのポイントを押さえてみましょう。

- ①お店の価値を掘り下げて、定義する
- ②お店の価値に共感するお客様を見つけること、
- ③お店の価値を、共感してくれるお客様に届けること

①お店の価値を掘り下げて、定義する

お客様は価値を感じない場所にはコストをかけません。みなさんもそうだと思います。まずは、そこに行くかどうか体験・経験・時間が過ごせるのかをはっきりさせてみましょう。「価値」には、物理的なものと、感覚的なものと、2つに分けて考えてみると良いかもしれません。

物理的：新鮮な食材が楽しめる、こだわりのカフェラテが美味しい、インテリアが好き…
感覚的：癒される、気持ちの良い、元気になる、毎回新しい気づきがある、面白い人に出会える…

この価値には上記2つの切り口のほかに、経営者が目指す未来の姿や、社会的な意義、目的なども含まれてきます。お客様にどうなってほしいのか、どんな未来をつくりたいのかなどをもう一度見つめてみると良いと思います。

②その価値に共感してくれるお客様を見つけること

いわゆる、誰をターゲットにするかということなのですが、①で考えたような価値を、価値だと思ってくれるお客様がいるかどうかを考えていきます。お店には複数の価値があると思います。その複数の価値を組み合わせながら、居住地・年齢・性別・行動・考え方などお客様のタイプとマッチングしていく作業です。①と②は行ったり来たりしながら、色んな可能性を探っていくのが良いと思います。

(次回につづく…)

●より詳しく聞きたい、相談したいという方がいらっしゃいましたら、ご連絡ください！



家族連れ体験ツアーで賑わっていました。

【編集後記】

●10月某日、駆け込みで伺ってきた苫小牧一本防波堤「苫小牧港海釣り施設」。昨年からはスタートした有料釣り場です。釣りはまだまだ不慣れで、イソメをつけるのも苦労しながら半日楽しんできました。釣果はゼロでしたが、それでも気持ちが良く幸せな時間でした(笑) こうした先進事例に学びながら、白老港でも有料釣り場を実現できないかぜひとも進めていきたいと思っています！

●先日すごく嬉しいことがありました。役場のある人と打ち合わせをしていたこと。[うまくいくかどうか分からないんですけど]と私が前置きをしたとき、「可能性を探っていくのがSHIPSだと思っているし、そこに可能性があったとしても、それを確認していく作業に意味があると思いますよ」と。SHIPSのテーマは「可能性を広げる舟を出す」なので、そう認識いただいていることがとても嬉しくて、めちゃくちゃやる気になりました！これまで、設立説明会や、先日の「シン・白老港」でのキックオフミーティングなど、私の思いや白老町でどういった役割を担いたいかお話しせてもらっていますが、伝えていくことが本当に大事なことだと、広報PRの専門家として仕事してきましたが、今更ながら、改めて、自分自身のプロジェクトで実感しています。

11月・12月は、「海と港のカラオケスナック なつこ」をやっています。
色んな話を聞いたりお話ししたりしながら、少しずつ皆さんの思いも一緒に形にしていきたいと思う今日この頃です。
一般社団法人SHIRAOI PROJECTS 代表理事 山岸奈津子

ルーツ&アーツしらおい2023 閉幕

アーティストインタビュ



梅田哲也



梅田哲也 Photo by Tsubasa Fujikura

その瞬間に居合わせたものが、パチッとハマるようなこと

昨年も招待作家として参加している梅田さん。ルーツ&アーツしらおい2022で発表した「回声」の続編として、白老町大町の「THE OLD GREY BREWERY」の直営店予定地を会場に、空間展示（インスタレーション）を行いました。登壇によって譲ってもらったガラススタンドの電灯として使われていたガラス球や、虎杖浜の漁師さんから頂いた漁網、大きなメガホンなどが、それぞれの存在が相互的に作用しあうような仕掛けで、その瞬間だけの音や光、空気が満ちている空間を作り出していました。



（回声） Photo by Tsubasa Fujikura

新しい人が地域に入ること、対話をする

昨年、虎杖浜に滞在していた梅田さんにとって、白老の強い印象は「大きな波音」と「海霧」、そして「美しいごはん」だそうです。全国各地さまざまな場所を訪れていると言います。



野生の学舎制作風景

野生の学舎 新井祥也

訪れています。海や山の食材が豊富なのでなく、食事習慣そのもののあり方に豊かさを感じると言います。

筆者は、白老町はまだ人口もいて（道内でも人口は上位40位圏）、大きな交通網もあって、他の地域に比べた「まだまだ焦っていない」と思うと伝えると、「だからごはんが美味しいのかもしれない」と、地域が持っているもの、住んでいる人、すごく豊かだと思っ。それがこれから、もっと産業化・観光地化していくとした時に失われてしまうものもあるんだろな」と言います。

とはいえ「やっぱりこれからの環境変化に対応するには、新しい人がどんどん入ってこないといけない」さらに「自分みたいな人間を含めて（色んな新しい人が地域に入ってくる時に）、対話をしながら、既存のルールや習慣をそれに合わせて最適化していくこと」が必要になるのではないかと、昨年・今年と白老に関わり感じていると話してくれました。

一人で制作していても、無数の存在と対話している

梅田さんと同様、昨年のルーツ&アーツしらおいで、アーティストの中で一番白老町に滞在し、白老町民

今年9月1日から10月9日までの約40日間に渡って開催された「ルーツ&アーツしらおい」が無事閉幕し延べ1万人ほどの町内外の方が来場され、昨年から継続して参加したアーティストや、白老にゆかりのあるアーティストらの作品を巡り楽しんでいました。中でも、白老在住の田湯加那子さん、青木陵子さん・伊藤存さんの作品の展示会場である旧社台小学校は、最終日までに1130名の方が訪れ、連日賑わっていたようです。

ルーツ&アーツしらおい2023
今年で3年目となる白老町内を舞台に開催される文化観光プロジェクト。社会/白老市街地/虎杖浜の3地区で展示やパフォーマンスなどを行った。
日時：9月1日①〜10月9日②
主催：白老文化観光推進実行委員会

今回目指したのは、「柱を立てる」ということ。白老に来た時から、「深い霧に包まれた異界のような海の印象を強く持つていて、柱を立てるイメージがうまれた」と言います。

「巨大な流木が流れていて、どこから流れてきたのかもわからないけれど、かつてどこかで生えていた巨木が役目を終えて、長い時間をかけて漂着して一度生命を終えたものを使うっていうことがいいな」と、今回白老へ若小牧の海岸を延々と歩き見つけた、界限でひととき大きかった流木を社台の海岸に運び入れ、雨の日も台風風の近づく風の強い日も、そして今年の炎天下の中、2週間にわたり流木を海の手く傍らで彫り続けた。



（交信） Photo by Tsubasa Fujikura

「ちょっと火山と海に挟まれた場所、ダイナミックな自然の鼓動みたいなものを感じつつ、波の音、風や雨がアールシートを叩く音なんかと自分の心臓の音や呼吸が共鳴していく感覚」や彫り続けていることで見えてくる流木の年輪を見て、「断面が、水の波紋や地層みたいに見えてきて…。年輪って木が生きてきた時間だから、彫っていくことで木の持つてきた時間の内側に入っていきような感覚があった。

ナタリー・ツウ



ナタリー・ツウ Photo by Tsubasa Fujikura

自分の体とか感覚を通して、その土地の記憶にアプローチする

オスロと東京を拠点に幅広い分野で活躍するアーティスト、研究者で、今回ルーツ&アーツしらおいには初参加。風景の記憶の探求をテーマに、その方法に音を道具として用いるのがナタリーの作品の特徴で、白老でのプロジェクトも「音」が大きなポイントとなっています。

リサーチの際に、虎杖浜神社の吉良さんに、アロロ川が昔と現在では形が変わっているという話を聞き、自身の活動テーマと合致したこと、アロロ川をモチーフにした作品制作がスタートしました。その中でキーワートは「Daphnes of forest」。

「耳が聞こえないという話ではなく、耳では聞き取れなくても、振動を感じることで、触ることなど、聴覚以外で音を感じること。音の作品だけれど、聴覚で聞くだけじゃないということ」を大事に考えていきたいとナタリーは言います。

このインタビュも、まとまるかな、まとまらなくていいよね、予定調和じゃつまらないもんねという話で終わりました（笑）

ダフネス、意識しないと聞こえない体感できないもの

白老を訪れる人々によって、ウポポイのこと、町のことを接続していきながら、その土地の歴史やこの場所に対して、深く深く見つけていけるかが、一番可能性を広げることではないかとナタリーは話します。よそ者として、その土地の声を聞くような姿勢や深い思考が訪れる人には必要ではないかと感じているようです。

その中で、ルーツ&アーツしらおいのようなアーティストが地域で作品をつくるということは、「土地を深く知るとか、土地の声を深く聞こうとする人にとって手助けになる」。そういうものを作りたいとナタリーは続けている。意識しないと聞こえない体感できないものに、耳を傾けられるのか、さまざまな感覚を使って「聞く」ことができるのか、まさに今回のナタリーの作品のキーワートである「ダフネス」に繋がる話になりました。



（音のない水たちのささやき） Photo by Tsubasa Fujikura

3人のインタビュを通して、「対話」「声を聞こう」と気持ちを開けること

SHIPSらしく海に繋がる作品を展開した梅田さん、野生の学舎、ナタリーに今回のインタビュを依頼したわけですが、これからの白老の、地域の可能性の話は図らずも「対話」や「聞くこと、耳を傾けること」という同じ方向性でもっと興味深いことでした。

私がアートの勉強をしている時に、仕事仲間から教えてもらったアートの効能として、他者を理解しようとするトレーニング的な部分があると聞ききました。不可解な作品に対して「なんだかよく分からん」とすぐ跳ね除けてしまおうとはしますが、「なんでこんなものを作ったんだろうか」「何を考えたいのだろうか」と他者へ歩み寄り、言葉をお互いに交わさないか関係なく、対話してみることが、アーティストの醍醐味でもあります（結局わからんってことにもなるのですが、姿勢や意識という意味で）。

この「対話」したり、気持ちを開ける姿勢、というのは、ちょっと気持ちを緩めると抜け落ちてしまう部分です。アート鑑賞なんでもに関わらず、日常的にも、対話が必要場面はたくさんあります。それは地域に住んでいる人も、地元の人と他所から来た人、家族・夫婦・友人同士、対話が足らずに失敗することも多々ありますよね。なんなら、自分の本当の気持ちと対話出来ていないことでもあります。日々、忙しく過ぎていく中で、この「気持ちを開ける」だけの時間と気持ちの余裕を確保する難しさは誰もが感じるところなのではないかと思えます。そんな中だからこそ、アーティストの3人が可能性を感じるのかもしれない。未来がどうなっていくのか、数十年前とは全く違うスピードで世界が進んでいくなかで、自分は「みんなはどうなっているんだろう」と、意識的に耳を傾けること、対話を繰り返していくことの大切さがより高まっていく気がします。そんなことを考えさせてくれるアートは、やっぱり面白いな！という気持ちが強まった今回のインタビュでした。

来年も楽しみにしたいと思います。SHIPSでも、アーティストが地域に関わり意識的に「対話」を繰り返してくれることで、聞こえなかった声や見えなかった景色を私たちに体感させてくれるようなアートプロジェクトを実施していきたいと、現在計画中です。こちらも来年に向けてお知らせできるように取り組んでいきます！